

いま日は海に
曾野綾子

いま日は海に

昭和五十年二月十六日 第一刷発行

昭和五十年十月二十日 第六刷発行

著者 曾野綾子

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二／郵便番号二二二

電話東京(〇三)九四五―二二二(大代表)／振替東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 大製株式会社



落丁本・乱丁本はお取り替えます

© Ayako Sono 1975, Printed in Japan

目次

第一章 挨拶

5

第二章 鎖

128

第三章 太陽と蜂

255

装
幀
原

弘

いま日は海に

第一章 挨拶

1

足音は突如として、玄關から、善野ぜんの加陽子かようこの遊んでいた廊下の方へ入って来た。正確な、親しげな素早さで……。

それは不法な闖入者の足どりではなかったので、加陽子は恐怖を感じたわけではなかったが、反射的に、彼女ははっと俯うつむいてしまった。

「今日は」

頭の上から声がした。加陽子はちらと眼をあげ、黒い縁どりのある紺の軍服が、両脚をきちんと揃えて、加陽子を見下すように立っているのを見た。

「僕を覚えてる？」

相手は笑いながら尋ねた。

加陽子は知っていた。それが母の友人の息子の西山大樹おおきだということを知っていたが、知っているというのも恥かしいので、彼女はまた床の上に目を落した。加陽子は一人でおはじきをし

て遊んでいたのだった。

「お母さんは？」

今度は加陽子は、ぱっと立ち上った。客に返事はせずに、茶の間を駆け抜け、台所の踏み板をがたがた鳴らしながら、転げるように、ちびた下駄をつっかけて、北風の吹いている裏口へ出た。

炭俵や練炭の積みである開けっ放しの納屋のところから道へ出ると、小径の向うの吉田さんという家の、南に面した陽溜りで、母が吉田さんの奥さんと立話をしているのが見えた。

「お母さん、お客さん！ お客さん！」

加陽子は叫んだ。

「どなた？」

「誰でもいいから」

加陽子は母親の手にすがった。母は手に笊ざるを持っていた。何か珍しい食物があったのでお裾分けに持って行ったものと見える。

「誰なのよ。本当にお客さま？」

「本当だってば」

「知らない方？」

「知ってる人」

「じゃ、ちゃんとおっしゃい」

「知ってるけど教えない」

「いやな子ねえ、本当にもっとはつきりなさいよ。まあ、ほんとうに奥さま、おじゃま致しまして……」

母と吉田さんが、かわるがわるお辞儀をし合っているのを見ながら、加陽子は、大人とはどうしてこうもひとの気持がわからないものかと思った。西山大樹の名前を口にするのはどうしてもはずかしいから言わなかったのだ。それを母は平気で他人の前で言わせようとする。

「誰なのよ、本当に」

と言いながら家へ戻ってくる母の腕にぶら下るようにして、加陽子は歩いた。風の中を横切る時は、思わず、身を縮めた。母が台所で木のサンダルを脱ぎ、着物の裾から、脛の半ばほどまでをきゅっと出して、台所へ上るのを、加陽子は見送った。

「まあ、大ちゃん」

母の声が陽のさしている方から聞えた。

「明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いいたします」

「こちらこそ！ 北海道はお元気だった？」

母の小学校からの親友の西山節のことを聞いているのだな、と加陽子はわかった。

「実は日数が足りなかったので、北海道へは行かなかったんです」

西山大樹はまだ、姿勢をくずさずに立っていた。

「そんなところに立っていないで、さ、こちらへいらっしゃい。お炬燵、あったかくなっていますから」

母が茶の間の切り炬燵のところに行き、蒲団をまくり上げて中に頭をつっこみ、火をかき立て

ている間、ほんの一瞬、加陽子は大樹が、自分を見つめているのを感じていた。彼のはいていた白い靴下の爪先が、自分の方に向けられていたからである。それで彼女はやはり顔をあげず、おはじきをかたづけようとしてかがみ込んでいた。そして、顔をあげて見なくても、眼が頭のとっぺんあたりに移動したように感じられるから、相手の視線がわかるのだな、と思った。

「加陽子さんは、何年生になりました？」

西山は母に向って訊いていた。

「小学校の六年生ですよ。それなのに、この子はおくてで成績も悪くてねえ。まだ、おはじき遊びでしょう。一人前にご挨拶することもできないもんで、お父さんは歎いてるんですよ」

加陽子は肩のあたりで切り揃えられた髪を揺らしながら、大人たちの話を聞いていた。加陽子は、母が言った通り、学校の成績があまりよくないのだった。父親が、中学の教頭で、母親も昔、小学校の先生をしていたことがある、ということは何となく知れ渡っているから、世間は誰もが、加陽子のその成績の悪さを訝しく思っているらしい。その気配を感じないではないから、加陽子はいつも、何か事の起りそうな時には、素早く視線を伏せて、答えを求められないようにしていたのである。

「加陽ちゃんの成績、本当に悪いんですか？」

「本当なのよ。下から一割くらいのところかしら」

加陽子はいよいよ恥じて俯いているうちに、よだれをぼつんと縁側の上に垂らしてしまった。しかしそれは素早く、おはじきとかきまぜたので、多分、西山大樹は気づかないで済んだらうと思われた。

「加陽ちゃんは、何が不得意なの？」

大樹は、こちらを向いて尋ねた。

「加陽子、ちゃんと自分でお答えしなさい」

やっと加陽子は顔をあげた。胸が高鳴っていた。

「何でも、全部」

やっとそれだけ答えた。

「そんなことはないよね」

大樹は加陽子を見つめた。

「お裁縫はわりといいわね。この子は指先が器用なんですよ。フランス刺繡しゅうの糸をほしがるし、この間は、慰問袋に、きれいに毛糸刺繡したわね」

母はとりなすように言ってくれた。

「それとお料理もよくしますよ。ちょちょこ手伝ってくれます。下の実根子がぎりぎり型でしょう。年も二つしか離れていないし、それで加陽子は押されっ放しで可哀想なんですよ」

「今日は実根ちゃんと、小父さん、おでかけですか」

「ええ、ちょっと親戚のうちで皆が集るもんで行ったんです」

「加陽ちゃんは何で行かなかったの？」

「昨日まで熱があったのね。今日はもういいんですけど」

だから、正月の晴れ着の下に、ころころになるほどシャツを着せられているのだった。

「今日は、ゆっくりして行けるの？ 泊って行っていいの？」

「それはできないんです」

「じゃあ、夕食だけならいいんでしょう。小父さんもそれ迄には帰ってくると思うから」

「ええ、それだけはじゃあ、ごちそうになって行きます」

「加陽子、もう、そろそろ、寒くなってきたから、いつ迄も縁側にいるのはよしなさい」

母は、夕食の仕度立に立ち上りながら言った。

「加陽ちゃん、こっちへおいでよ」

大樹が呼んだ。

「炬燵がとてもあったかい」

加陽子は、やっとおはじきを箱にしまい、縁側から腰をあげた。本当に、日中は一番温い縁側が、冬の夕暮ともなると、どうしてこうもいちちはやく水が流れ込むように冷えて来るのだろう。

炬燵のところまで来て、一瞬どこへ坐ろうと考えた挙句、加陽子は、大樹の隣の座布団に坐った。本当は大樹と離れて坐るべきようにも思ったのだが、離れて坐ると、面と向って顔を合わせなければいけない角度になるので、それを避けるためであった。

「先学期とくに悪かったのはなんなの？」

大樹は加陽子に尋ねた。

「国語と算数と理科です」

加陽子は答えた。

「国語なんか、お得意じゃないかと思ったけどね」

「書き取りを、まちがえるの」

「じゃあ、見てあげよう。教科書と、ワラ半紙か何か持っておいでよ。書き取りの練習してあげる」

加陽子はおもいおもいしていた。するとその気配を察して、台所の母が言った。

「加陽子、せっかく勉強みて下さるっておっしゃるんだから、ちゃんと道具を持って来なさい」

加陽子は言われた通りにした。

ワラ半紙の下にセルロイドの下敷きを素早くはさんだ。下敷きは貼り絵だらけであった。そんなところへ貼ってはいけないと言われているのに、加陽子は、下敷きとは、貼り紙を貼るものだとしか思えなかったのだった。

加陽子が、それを意識していると、大樹はまた敏感に、それを察したように、すいと取り上げてみて、

「ずいぶん沢山貼ったね」

と、加陽子に言った。

「これは何なの？」

「藤娘」

「これは？」

「白雪姫」

加陽子は、それから、初めて、普段の調子をとり戻していった。

「貼ってあげましょうか？」

「どこに？」

「おでこに」

加陽子はげらげら笑った。女の子三人で近所のイッチちゃんという男の子を押えつけて、ほっぺたに、のらくろの絵を貼りつけたことを思い出したのである。大樹の額に何か貼りつけたら、さぞかし面白いだろうと思ったのである。

「それは、ちょっと困るな。今、そういうのが流行^{はや}ってるの？」

「ううん。流行^{はや}ってるのは、ゴム飛び」

「書き取りをしようよ」

その時台所から、もう一度母が声を掛けた。

「大ちゃん、加陽子はね。ずっと前に教わった字でも覚えていないのよ。だから、これ位の字は知っているはずだ、なんて思わないで、どんな簡単な字でも書かしてみてちょうだいね」

「わかりました」と、大樹は言い、教科書を思いつくままだに開けて、加陽子の手許を見つめた。加陽子はすぐに、つかえ始めた。

「貿易の易^{やす}という字は、右側に、ちゅんちゅんはいらないんだ」

加陽子は、鼻をくすくすいさせた。「忍耐」の忍の刃の部分^やを、刀にしておいたのもいけなかったし「賛成」の賛に口をつけてしまったのも、まずいことをした、とは思ったけれど、大樹が「そういうえば、口で同意することが多いから、加陽子ちゃんの書く方が正しいみたいだけど、心

や行動で支持することが、本当の賛成なんだろうね。だから口はいらないんだ。そう思えば、これから間違えないで済むだろう」と言ったので加陽子は大きく頷いた。こういう風にして教えられれば、覚えられない頭ではないのだ。けれど、学校の教え方は、つまらないし、もっと事務的に素早く教えてしまうので、加陽子のような、いつも表ではねていたいような娘の頭には、どうも引っかけが悪いのである。

三十分程、書き取りの練習をすると、大樹は、

「僕の名前は書ける？」

と尋ねた。

「書ける」

加陽子は言って、書き始めた。

「大樹の樹っていう字が、むずかしいよ」

加陽子は、紙の上にかがみ込んで、まず木へんを書いた。それからちよつと考えて、土を二つ書き、その右に寸を書いた。

「似てるようだけど、ちよつと違うんだなあ」

大樹にそう言われた時、加陽子は心の底から悲しくなった。

「寸がなければ、桂かつらという字になるけどね。僕のは、木へんに、十に豆なんだよ。わかる？ 僕が豆腐が好きで、豆腐を十丁食べたことがある。だから、十豆だと書くんだと覚えていればいいでしょう？」

事もあろうに、相手の名前を間違ってしまうなんて、なんということだろう、大樹は、その事

を覚えていて、決して、自分を許さないに違いない、と思うと加陽子は、氣もそぞろだった。

間もなく、大樹が、

「そんなにお裁縫やお料理がうまいって、どんな指してるんだあ？」

と言いながら、加陽子の細い長い指を手にとってしみじみと見ようとした時、加陽子はまるで、振りはらうようにその手をはねのけてしまったのだった。

父と妹の実根子が、帰って来たのはそれから間もなくであった。実根子が、靴下のずり落ちそうになった両膝をきちんとそろえて、「いらっしやいませ」と挨拶するのを加陽子は台所でお客用の会席盆を拭きながら聞いていた。

「いつ、中尉になったの？」

父の声が、居間の方で聞えた。母は小皿に正月用に作ってあった酒の肴さかなを一品、二品取り分け、おかんをするためにお銚子に酒を移していた。

「ほんのついこの間です」

「それはよかったね。まあ、おめでとう」

大樹と父は、時局の話をしていたが、加陽子には、その話は、むずかしくてわからなかった。

ただ、大樹は、しきりに、父に、疎開すかいすることを勧めた。

「本当に、そんな必要はあるのかね？」

父は半信半疑のようだった。空襲は必至と見て防空壕を掘らねばならぬと言われていたが、ごく一部の富裕階級が、国策にそっているという名目で実は、離れを作るような楽しみを味わうために、中にピンポン台までそなえた防空壕を作ったとか作らないとかいう話が出ているだけで、